



「形容詞的なもの」と「副詞的なもの」： A prototypical approach

著者	山内 信幸
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	52-53
ページ	238-253
発行年	1991-02
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001675

「形容詞的なもの」と「副詞的なもの」

A Prototypical Approach*

山内 信幸

I

人間の認知作用において、「範疇化 (categorization)」は極めて重要な役割を果たしている。新しい属性を認識したり、類似の属性を識別したりする作業を通して、我々は対象への理解を深めていくが、その際、無意識のうちに種々のカテゴリーを利用している。

従来のカテゴリー論では、あるカテゴリー内の要素とカテゴリー外の要素が、「非連続的 (discrete)」な関係にあるとされてきたが、近年、このような伝統的カテゴリー論に疑問が投げかけられるようになってきた。つまり、人類学や心理学の分野における色彩語彙や概念的及び知覚カテゴリーの分析が明らかにしてきたように、¹それぞれのカテゴリー間のみならず、カテゴリー内にも連続性 (non-discreteness) が存在することが指摘されてきた。

本稿では、修飾語としての形容詞及び副詞に焦点をあて、従来のような形容詞・副詞といった文法範疇そのものの不整合性を指摘し、その代案として、形容詞及び副詞の間に中立的な機能範疇を設定し、その範疇内で、「形容詞的なもの (adjective-likeness)」と「副詞的なもの (adverb-likeness)」が一つの連続体として存在するという仮説を提案する。²

II

本節では、形容詞と副詞との形態論的な関連性について2つの可能性を提示し、どちらか一方を基幹としてもう一方を派生させることが妥当かどうか

を検討する。

形容詞と副詞を形態論的に関連づけようとする一つの（そして支配的な）可能性は、次のような多くの文法学者の発言に代表されるように、

“This ending [-ly] serves to form adverbs from nearly all adjectives”³

“with [-ly] it is possible to form an adverb . . . from any adjective”⁴

形容詞を基幹として、それに -ly という接尾辞をつけて副詞を派生させるというものである。

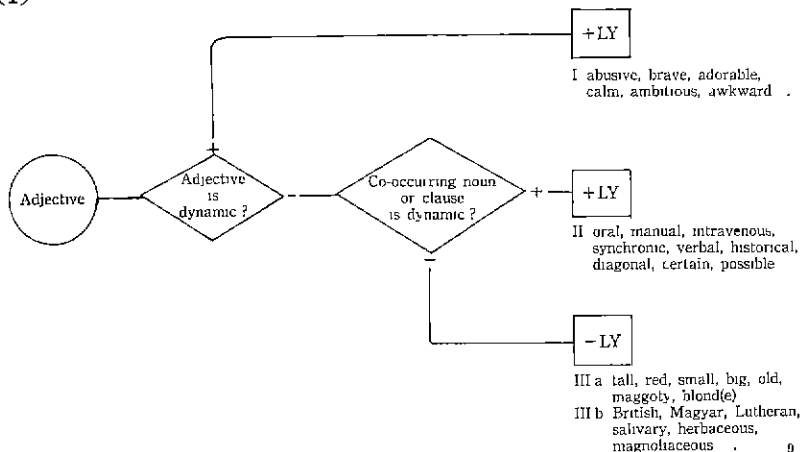
この立場を採る Kjellmer (1984) は、英語の -ly 形の副詞の生成に関して、統計学的・意味論的分析を行なっている。⁵ まず、どのような形容詞あるいは形容詞の形態論的タイプが -ly 形の副詞を生成するかを調べるために、形容詞の範疇として、-able, -al, -an など主なものを50個選び、Lancaster-Oslo/Bergen Corpus⁶ に基づいてその分布数と、さらに、対応する語彙化された -ly 形の副詞⁷ の分布数を求めた。これによって、それぞれの形容詞には -ly 形の副詞の生成力には差があることを指摘し、その比率の最も高いもので -ful→fully の41%で、最も低いもので -oid→oidly の0%で、平均値は13%と報告している。⁸

次に、形容詞から副詞を語彙化する要因として、形容詞（あるいは形容詞と共起する名詞や節）のもつ特質の一つである “dynamic” を挙げ、次の図に示すような一般化を提案している。

(1)の図は、まず、形容詞そのものが “dynamic” なものであれば、対応する副詞を生成し、さらに、形容詞そのものは “dynamic” なものでなくても、それと共起する名詞や節が “dynamic” な特質を有していれば、対応する副詞を生成する傾向が高いことを示している。

しかしながら、形容詞を基幹にして、そこから -ly 形の副詞を派生させる

(1)



場合に、[±dynamic] という素性が深く関与しているという主張には若干の問題点があるように思われる。まず第一に、Kjellmer (1984) 自身の調査結果が皮肉にも物語っているように、圧倒的多数の90%弱もの形容詞が対応する -ly 形の副詞をもたないという事実から、ごく限られた数のデータによる一般化は幾分危険を伴うように思われる。

第二に、Kjellmer (1984) が -ly 形の副詞の生成に働く決定的な要因として挙げている [±dynamic] という素性は非常に相対的なものであり、[-dynamic (= [+stative])] とされている形容詞の中にも時には “dynamic” な用法もありうるという事実を指摘しておかねばならない。

例えば、“tall” という形容詞は、Kjellmer (1984) によって分類された [-dynamic] のグループの中にも見い出されるものであるが、次例の示すように、

(2) Bill is being tall to reach the overhead shelf.

(=Bill is now on tiptoe.)

「頭上の棚に手を伸ばしてつま先立ちしている」ような場合には、[+dynamic] に転じて、進行形と共に用いられている。

確かに、tall に対応する *tally は語彙的には存在しないが、tall と同じ [-dynamic] に属すると思われる rich や buxom 等の場合はどうであろうか。従来、[+dynamic] なもののみが命令文で用いられるとされているため、¹⁰

(3) *Be rich/buxom.

のように、rich や buxom は予想通り、命令文とは共起しないけれども、語彙的にはそれぞれ対応する -ly 形の副詞 richly や buxomly は存在している。このような事実からも、tall→*tally は、いわゆる、語彙的な “accidental gap” と考えるほうが妥当ではないだろうか。

以上見てきたように、形容詞と副詞を関連づける一方策として、形容詞から副詞を派生させるという前提に立って試みられた Kjellmer (1984) の一般化は、統計学的に依拠できうるデータ値が低すぎる点、次に、意味論的基準として挙げた [±dynamic] という素性が相対的なものであり、副詞の生成力に関して決定的な要因となり得ないという点で、不十分なものであり、結局のところ、「形容詞を基幹にして副詞を派生させる」という前提そのものが誤っていたと結論せざるをえない。

次に、もう一つの形容詞と副詞を形態論的に関連づける可能性として、副詞から -ly を削除して形容詞を派生させることが考えられるが、これは、Kjellmer (1984) のデータが示すように、形容詞と副詞の分布比率が圧倒的に副詞のほうが少ないために、このような派生の仕方に有意義な一般化は望むべくもない。

本節では、形容詞及び副詞の派生方法として、「どちらか一方を基幹にして他方を派生させる」ことで互いを形態論的に関連づける試みを検討してきたが、どちらの方法にもそれぞれ問題点を含んでいることを指摘した。次節では、他の可能性を探ってみる。

III

本節では, Sugioka & Lehr (1983)⁴¹ の示唆的な議論を基に, 形容詞と副詞の関連性について新しい可能性を探ってみる。

Sugioka & Lehr (1983) によれば, すべての VP 副詞は, 基本的には, レキシコン内では -ly を伴わない形で入っていると仮定し, 次に -ly 形の副詞を派生させるには,

- (4) Insert -ly in [[x]_____]: where x is the sister of V dominated by VP or AP

という規則を導入することによって, VP か AP に支配されている V と姉妹関係にある場合に -ly 形が付加されるとする。一見するとこの規則の例外と思われる, いわゆる, -ly のつかない flat adverb の取り扱いに関しては, (5) に見られるように,

- (5) a. Joe did it *beautiful/beautifully*.
 b. **Beautiful/Beautifully* Joe did it.
 c. Joe **beautiful/beautifully* did it.

-ly の付かない形は文末にしか現われないことから, 文末という surface constraint によってこの規則の適用を免れていると説明している。

次に, Verbal Compounds (=VC) の取り扱いに関しても, 上述の主張を踏まえて, 例えば, 次例からも明らかなように,

- (6) a quick thinker
 =someone who thinks quickly
 ≠a thinker who is quick

“a quick thinker” の “quick” は, 形態論的にも意味論的にも副詞であると分析している。よって VC は次のような規則によって派生される。

(7) Insert -er in : [[xV]_____]N, Agent : x=N, Adj, Adv

つまり、副詞の *quick* と動詞の *think* が結合し、-er 形をもつ動作名詞に変えられて、*quick thinker* を生成するというものである。このような compounds においては、副詞は常に動詞的な要素を修飾していると規定される。故に、次例の *a beautiful dancer* のように、二通りの意味解釈が可能な場合においても、

(8) *a beautiful dancer*

=someone who dances beautifully

=a dancer who is beautiful

前者の *someone who dances beautifully* から派生されたと考えられる場合を VC の具現化したもの、後者の *a dancer who is beautiful* から派生されたと考えられる場合を Adj-N phrase の具現化したものとして、構造的に異なるものという説明を与えている。

Sugioka & Lehr (1983) の主張で見るべき点は、基底のレキシコンのレベルでは、-ly のつかない形（換言すれば、形容詞と同形のもの）を仮定し、(i) VP や AP に支配される V と姉妹関係にある場合に -ly が挿入され、また、(ii) VC の場合には、(i) で述べた規則の適用を受けないため、-ly のつかない形で具現化されているが、意味的には副詞の働きをしていると主張している点にあらう。従来は、形容詞と副詞の相違を、言わば、表面的な相違すなわち、-ly の有無に帰結させられていたが、形態論的観点からすれば、基底の段階では、形容詞と副詞を中立化 (neutralization) して捉えているという点において、Sugioka & Lehr (1983) の主張には、修飾語というものの性質を考察する上で重要な示唆が含まれている。本稿では、Sugioka & Lehr (1983) の基本的な考え方を支持する立場を採るが、-ly が屈折接辞か派生接辞かは議論の分かれるところである。¹² 文中における統語的な役割に応じて、その形態が変化するという点で、Sugioka & Lehr (1983) は、そ

の論文名が示すように、-ly を屈折接辞と論じているが、屈折か派生かの区分は、Carstairs (1987) も指摘しているように、¹³ いわゆるプロトタイプ論的な処理の仕方、つまり、連続体の中で捉え、程度差を認める立場で考察するべきであるように思われる。

以上のことから、従来のような形容詞や副詞という形態に基づく文法範疇の基準による特徴づけではなく、もっと柔軟な視点から、文法範疇というものに拘泥しないアプローチが必要になってくる。

IV

本節では、機能範疇として、形容詞と副詞の中立形を設定し、¹⁴ その機能範疇内において両者の属性が一つの連続体の中に存在することを論じる。

被修飾語として言語普遍的に存在するとされているクラスに名詞と動詞があるが、両者の背後にあると思われる共通した意味的特徴は一体何であろうか。本来、名詞は事物を、動詞は行為を示すとされているが、両者を一つの基準で関連させようという試みに Givón (1979/1984) がある。Givón (1979/1984) は認知的な知覚表象として“time-stability”というカテゴリー内で、名詞的なもの (nouniness) と動詞的なもの (verbiness) を一つの連続体の中で捉えることを提案した。¹⁵

- (9) “Experiences ... which stay relatively over time ... tend to be lexicalized in language as nouns At the other extreme of the lexical-phenomenological scale, one finds experiential clusters denoting *rapid changes* in the state of the universe ... languages tend to be lexicalized them as adverbs.”¹⁶



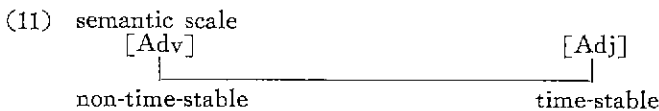
このような分類に基づいて、Hopper & Thompson (1983) は、名詞や動詞の語彙項目そのものは、機能的には、あまり区別されるものではなく、

「名詞性」や「動詞性」というものは、格や時制のマーキングといった形態的な道具だてによって決定するという主旨のことを述べている。^{17,18}

仮に、「名詞性」及び「動詞性」が、Givón のいう “time-stability” という scale で統一的に扱えられるとすると、それらを修飾する働きを担う形容詞や副詞も何らかの同一の scale 上に分布して、“time-stability” という scale と重なり合って機能していることが予想される。そこで、形態的側面、意味的側面及び機能的側面から、形容詞と副詞を連続体の中で捉えることが可能かどうか検討してみることにしよう。

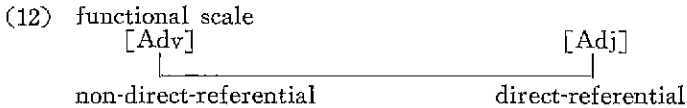
まず、形態的側面に関しては、第二節でも述べたように、どちらか一方を基幹に他方を派生させることには実質上困難さを伴い、接尾辞 -ly 自体も必ずしも副詞語尾とは言い難い状況から、従来の形容詞・副詞などの文法範疇による -ly の付加の有無という形態に基づく一般化よりは、形容詞と副詞の中立形を設定するほうが妥当であるように思われる。そこで「修飾語」を表わす従来の文法用語である “modification” との混同を避けるため、便宜上、その中立形を “modification” と呼ぶことにする。

次に、意味的側面に関しては、複雑かつ多岐にわたる形容詞や副詞の意味から共通する属性を抽出することは困難であるように思われるので、¹⁹ 被修飾部である名詞及び動詞との関連性という間接的な特徴づけのみが可能であろう。つまり、形容詞や副詞は、その被修飾部である名詞及び動詞が共通して属するカテゴリーとされている “time-stability” と、当然のことながら、密接に関連することが予想されるため、「形容詞的なもの」及び「副詞的なもの」もまた、この “time-stability” という scale 上に存在すると仮定する。²⁰



最後に、機能的側面に関しては、主要語を中心とした形容詞の配列順序が

形容詞の階属性に起因すること²¹や副詞の生起位置が副詞の階属性に起因すること²²などから、両者の有する共通の属性を「被修飾部への修飾機能」に求め、その被修飾部への「関与性」の強弱の度合いに応じて次のような“direct-referentiality”という scale 上に分布すると仮定する。²³



つまり、これは「形容詞的なもの」と「副詞的なもの」は“direct-referentiality”という機能的な scale 上に連続体として存在し、[+direct-referential] な要素が強くなれば、形容詞的な働きを有するものとして具現化し、また、[-direct-referential] な要素が強くなれば、副詞的な働きを有するものとして具現化することを表わしている。以下もう少し詳しく見てみよう。

ここで言う“direct”とは、距離的な関与性と程度の関与性の両義的な意味を持っていると考えられる。まず、距離的な関与性における直接さとは、形容詞の場合、特に主要語の前か後というように分布が固定して、被修飾部に近いところで生起するのに対し、副詞の場合は、文頭、文中、文尾に比較的自由に現われ、被修飾部に必ずしも近くなくてもよいことを表わしている。例えば、

(13) We lent him a *willing* ear.

上の例では、機能的には、willing の被修飾部は“ear”ではなく“lent”であることは明らかなので、文法範疇としては形容詞になるかもしれないが、文法機能という点では、“non-direct-referential”の要素を持ち、被修飾部から離れているため、「副詞的なもの」になっていると見なされよう。

また、次のような文法範疇としては副詞に属するものが、被修飾部に近いという理由で“direct-referential”な要素を持って、「形容詞的なもの」に転じている場合もある。

(14) a *down* train, an *off* day

次に、程度的な関与性という属性は、言い換えれば、被修飾部への関与が文構造上必要か否かを表わしていて、文法機能の点から言えば、補語的な機能を有しているかどうかを表わしている。

例えば、次の例文を比較してみよう。

- (15) a. John wrote a letter *badly*.
 b. John treated his child *badly*.

どちらも類似した構造を成しているが、両者の *badly* の機能は著しく異なっている。まず第一に、(16) で示すように、(15a) の *badly* は省略可能であるが、(15b) 場合は省略できない。

- (16) a. John wrote a letter.
 b. *John treated his child.

第二に、(17) からも明らかなように、(15a) の *badly* は動詞の前に移動可能であるが、(15b) は移動できない。²⁴

- (17) a. John *badly* wrote a letter.
 b. *John *badly* treated his child.

これらの相違を説明するには、ただ文法範疇に依拠するだけで不十分であり、両者の機能上の相違、すなわち、(15a) を随意的な機能を持つもの、(15b) を義務的 (= 必要不可欠) な機能を持つものとして、それぞれ、具現化されていると見なさねばならない。²⁵

また、この機能範疇を設けることで、次の (18) 及び (19) に見られるような異なるレベル間の対応関係が自然に説明できる。

- (18) a. He looked *happy*.
 b. He looked *like a girl*.

- c. He looked *as if he were a girl*.
- (19) a. He treated me *badly*.
 b. He treated me *like a lady*.
 c. He treated me *as if I were a lady*.

(18) においては、斜字体の部分は、語・句・節のレベルで、すべて looked に後続する必要不可欠な機能を有していることは明らかであり、その意味で “direct-referential” な scale に属し、「形容詞的なもの」と見なすことができる。また、(19) においても、すべて伝統的には副詞の働きをしているものとされているが、本稿の議論を敷衍すると、いずれも必要不可欠な機能を果たしていると言えるので、同じく、“direct-referential” な scale に属し、「形容詞的なもの」と見なすことができよう。

このように、従来なら異なる統語範疇として捉えられていたものでさえも、いずれも [+direct-referential] という機能を持つものとして平行的に取り扱うことができるのはこのアプローチの優位性を示すものと言えよう。

V

本稿では、まず、Kjellmer (1984) の分析を足掛かりにして、英語の -ly 接尾辞を形態論的観点から統一的に扱えるかどうかを検討し、次に、-ly を屈折接尾辞と分析する Sugioka & Lehr (1983) の主張を採用し、形容詞と副詞を中立形として扱う可能性を示唆した。さらに、上述の議論を踏まえて、Givón (1977/1984) 以来受け入れられている名詞と動詞を [time-stability] という同一の scale 上にプロトタイプ論的に位置するという主張とからめて、それらの修飾語である形容詞や副詞もまた、語彙的には、“modification” という中立形として存在し、意味的には、名詞や動詞を具現化している [±time-stability] という属性と密接に関連しながら、さらに、機能的には、[±direct-referentiality] という scale 上でそれぞれ「形容詞的なもの」及び「副詞的なもの」に具現化されることを提案した。

これによって、従来の“discrete”な考え方による文法範疇に基づく分析よりも、機能範疇を“non-discrete”なものとして捉える本稿の分析のほうが、言語事実を統一かつ包括的に扱えることを示した。

世界の言語の中には、形容詞という範疇を欠くものもあり、“direct-referentiality”という機能範疇を設定することの妥当性は今後のさらなる検討を待たねばならない。

注

*本稿は日本比較文化学会関西支部月例会（1990年3月10日・同志社大学）において、「Do Adverbs Come from Adjectives or *vice versa* ?」と題して口頭発表したものに加筆・修正を施したものである。当日、貴重な示唆と助言を賜った諸先生方に感謝の意を表する。

- 1 人類学の分野における先駆的研究としては、B. Berlin and P. Kay, *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution* (Berkeley: University of California Press, 1969) があり、一方、心理学の分野では、M. Posner and S. Keele, “On the Genesis of Abstract Ideas,” *Journal of Experimental Psychology*, 77 (1968), 353—63 や E. Rosch, “Natural Categories,” *Cognitive Psychology*, 4 (1973), 328—50 及び “Universal and Cultural Specifiers in Human Categorization,” *Cross-Cultural Perspectives on Learning*, eds. R. W. Brislin et al. (New York: John Wiley and Sons, 1975) や E. Rosch and B. B. Lloyd (eds.), *Cognition and Categorization* (Hillsdale, New Jersey: Erlbaum, 1978) などが挙げられる。
- 2 「修飾」という現象を情報構造と認知作用との連関でプロトタイプ論的に捉える可能性に関しては、拙稿「「修飾」について：A Cogni-Informational Approach」『同志社大学英語英文学研究』50号（1990年1月）、105—22を参照。
- 3 O. Jespersen, *Essentials of English Grammar* (London: Allen & Unwin, 1933), p. 94.
- 4 V. Adams, *An Introduction to Modern English Word-Formation* (London: Longman, 1973), p. 27.
- 5 詳しくは、G. Kjellmer, “Why *Great* : *Greatly* but Not *Big* : **Bigly* ? : On the Formation of English Adverbs in *-ly*,” *Studia Linguistica*, 38 (1984), 1—19を参照。
- 6 cf. S. Johansson, *Manual of Information to Accompany the Lancaster-Oslo/Bergen Corpus of English, for Use with Digital Computers* (Oslo: Department

- of English, University of Oslo, 1978).
- 7 考察の範囲の中には, good v.s. well のように語彙的関連性をもたないものや hard v.s. hard のように形容詞と副詞が同形のもの含まれていない。
- 8 同様の方法で *Collins Dictionary of the English Language* を用いた調査では, -ly 副詞/形容詞の比率は29%となっている。
- 9 J. Kjellmer, 17.
- 10 より厳密に言えば, 命令文との共起制限は, 「意思を働かせて行なえば, その状態が達成可能か否か」という「±self-controllable」という索性で説明する方が, より妥当かもしれない。
- 11 Y. Sugioka and R. Lehr, "Adverbial -ly as Inflectional Affix," *Papers from Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology and Syntax*, eds. J.P. Richardson, M. Marks and A. Chukerman (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1983), pp.293—300.
- 12 cf. J.R. Taylor, *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (Oxford: Oxford University Press, 1989), p.177.
- 13 A. Carstairs, *Allomorphy in Inflection* (London: Croom Helm, 1987), pp.4—6.
- 14 例えば, このような基底のレベルにおける「中立的な」語彙項目という考え方は, 早くには, Chomsky (1970) にも見られる。詳しくは, N. Chomsky, "Remarks on Nominalization," *Readings in English Transformational Grammar*, eds. R.A. Jacobs and P.S. Rosenbaum (Waltham, Massachusetts: Ginn and Company, 1970), p.190.
- 15 この "time-stability" という scale 上における区分も, 結局のところ, "entities" と "events" という原初的な区分に帰結することになるかもしれない。S.A. Thompson, "Discourse Approach to the Cross-linguistic Category 'Adjective,'" *Linguistic Categorization*, eds. R. Corrigan, F. Eckman and M. Noonan (Amsterdam: John Benjamins, 1988), p.261 の note 5 を参照。
- 16 T. Givón, *Syntax: A Functional and Typological Introduction, Vol. I*, (Amsterdam: John Benjamins, 1984), pp.51—2.
- 17 詳しくは, P.J. Hopper and S.A. Thompson, "Iconicity of the Universal Categories 'Noun' and 'Verb,'" *Iconicity in Syntax*, ed. J. Haiman (Amsterdam: John Benjamins, 1983), pp.151—83 を参照。
- 18 さらに談話のレベルにおける名詞や動詞のプロトタイプ論的な機能の分析に関しては, P.J. Hopper and S.A. Thompson, "The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar," *Language*, 60 (1984), 703—52 及び S.A. Thompson, pp.245—65 を参照。

- 19 例えば、Dixon (1977) は、英語における形容詞を構成する “semantic types” (本稿の議論においては “prototypes” に相当するもの) として、(1) Dimension, (2) Physical Property, (3) Colour, (4) Human Property, (5) Age, (6) Value, (7) Speed を挙げている。しかしながら、これらの “semantic types” をすべて副詞にオーバーラップさせることは不可能に近いであろう。詳しくは、R. M. W. Dixon, *Where Have All the Adjectives Gone? And Other Essays in Semantics and Syntax* (Berlin: Mouton, 1982), pp. 15—34 を参照。
- 20 Givón (1979/1984) によれば、形容詞はこの “nouniness” と “verbiness” という scale 上の中間に位置するとしているが、本稿では、便宜上、形容詞を別の scale の属性として考察を進めることにする。T. Givón, *On Understanding Grammar* (New York: Academic Press, 1979), pp. 320—3 及び *Syntax: A Functional and Typological Introduction, Vol. I*, p. 52 を参照。
- 21 詳しくは、安井稔、秋山怜、中村捷『形容詞』(東京: 研究社, 1976年), pp. 137—44 及び 156—63 を参照。
- 22 詳しくは、松浪有、池上嘉彦、今井邦彦編『大修館英語学事典』(東京: 大修館, 1983年), pp. 580—1 を参照。
- 23 副詞の機能を被修節部への「付加」ではなく、被修節部からの「抽出」と見なす試みに関しては、拙稿「A Proposal for Lexical Derivation—副詞の修飾機能をめぐって—」『主流』48号 (1987年2月), 89—104 及び “Where Do Adverbs Come From?” *Journal of Niijima Gakuen Women's Junior College*, IV (1987), 11—21 を参照。
- 24 この事実とは、「距離的関与性」のところで述べた modification の分布の固定の度合い(移動の可否)という観点からも説明できよう。
- 25 副詞要素の文法機能として補語的用法を認める論考としては、鈴木英一「副詞要素の補語的用法」『現代の英語学』安井稔博士還暦記念論文編集委員会編 (東京: 開拓社, 1981年), pp. 127—38 が挙げられる。

Synopsis

“Adjective-likeness” and “Adverb-likeness” : A Prototypical Approach

Nobuyuki Yamauchi

Since the ability of categorization is essential in the human cognitive process, it allows us to recognize new properties or to differentiate similar ones and afford a better understanding of the universe. This paper rejects the traditional treatment of adjectives and adverbs in English as grammatical categories and proposes the application of a new category approach, that is, Prototype Theory, to adjectives and adverbs.

First, two possible derivations of an *-ly* suffix in English are critically investigated, mainly based on Kjellmer's observations (1984). The next discussion is that the proposal by Sugioka and Lehr (1983) that an *-ly* suffix should be analyzed as an inflectional suffix leaves open the possibility that adjectives and adverbs should be uniformly treated as neutral forms. Furthermore, in connection with the “time-stability” scale, which Givón (1979/1984) termed to characterize the nouniness and the verbiness, it is suggested that adjectives and adverbs are neutralized as “modificationals” to be realized on a certain functional scale. Given the fact that the categories of adjectives and adverbs are not universal and primary properties, they are assumed to be endowed with a secondary property, that is, a referential function to qualify the nouniness and the verbiness, which ranges from “direct” to “non-direct” on the same continuum. Corresponding to the referents (the nouniness

and the verbiness), direct-referential properties tend to be lexicalized as “adjective-likeness” and non-direct referential ones as “adverb-likeness.”

In conclusion the superiority of the present analysis is confirmed, in which “modification” should be established as a functional category and “direct-referentiality” as a functional scale.